
オフ会のジャンヌダルク

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オフ会のジャンヌダルク

【著者名】

由一

N5281Z

【あらすじ】

現世に転生したジャンヌ＝ダルクは、ひきこもりを引退(?)し遂に自分のブログのオフ会に参加することになった。果たして会は上手いくのだろうか？ ジル＝ド＝レイの正体は如何に？ 初の複数話構成。

大須への進軍

私は、ジャンヌ＝ダルク。

かつて裏切りの炎によつて焼かれた私だつたが、数百年後の時を経て日本人「十字 まもり」に生まれ変わつてはや19年になる。

以前は人間にほぼ完全失望にしきつていて、学校も行かず、ずっと家にひきこもつていた私だつたが、1年ほど前にパソコンで始めたブログが大繁盛し、間接的ではあるが交流を持つようになつた。色々な問題も起つたが、ブログの訪問者数は増え、遂にこの度オフ会を開く事になつた。

知らない人のために説明するが、「オフ会」と言つのは、ネット上のみでの交流だつた仲間達が実際に顔を合わせ、食事会等の交流をすることである。どんな感じなのかは、私も今回が初めてなのでわからないが、オフ会が盛り上がるかどうかは今回のオフ会を主催したジル＝ド＝レイの腕にかかるところだろう。勿論、私も会のメンバーに据えられるわけなので、ただ黙つて食事を食べ続けるだけとはいかないだろうが。

とにかく人と会つのも久しぶりな上に、まったく未知の世界だ。目的の場所、大須に向つ私は不安と期待が入り混じつていた。

鶴舞駅のあたりから続く長い坂を歩いて行く。外の景色すら久しぶりだ。太陽が眩しい。

オルレアンにいたころの太陽とは、何かが違うように見える。同じもののはずなのに、いやに弱弱しく感じる。太陽は、私がいない

間に何が困った事でもあったのだろうか？私の眠っていた間に、多くのものが目まぐるしく変わってしまった。そして、それについて説明してくれる神の声は存在しない。私は、ただそんな世の中に翻弄されるのを拒んで、籠の鳥となっていた。そんな私が今、遂に籠を飛びだし生暖かいコンクリートの地面の上に立っている。これは、正しき事なのだろうか？

使った事もほとんど無い携帯電話を覗き見ると、表示される時計は3時45分をさしていた。

開始まで十分に時間はある。私は、ゆっくりとその坂を登つて行つた。

これまでの歴史（前書き）

オフ会会場へ向かうジャンヌ＝ダルク（十字　まもり）。メンバーは果たして集まっているのだろうか？

ぶらぶら大須を歩く事20分。

玉野屋は大須観音の近くのちょっとと田立たない場所にあった。 料亭の様な、なかなか古風な建物だった。かなり昔からあるのだ ろう。

信楽焼か何かの、大きな狸の置き物が私を出迎えた。

果たして、本当にここで良いのだろうか？
不安だった。本当に、ブログに来てくれる皆は来てくれるのだろうか？

もし、ジル＝ド＝レイ誰も来てくれなかつたら、私は未来永劫人間を信用するのはやめにしたい。一生、家の中でひきこもつてでもいようかと思う。

入口は手動だった。

私は、何か重苦しい、まるで決戦前夜のような感覚でガラガラとその扉を横にスライドさせる。

思わず瞑つてしまつた目を開ける。

玄関は、人気が無かつた。しかし、すぐにトタトタと足音が聞こえてきた。

「いらっしゃいませ」

出てきたのは4～50代の女性だった。

この店の女将さんか何がだろ？。着物姿でちょっと威厳がある。まあ、ナポレオンが称賛したと言つかつての私の威儀程では無いと思つが。

「え・と、お名前は？」

女将さんは優しげに名前を聞く。普通なら、今の名前を言つものだろ？が、オフ会なのでそういうのがないのだ。現世の名前を言つわけにはいかない。だから、答えは勿論こうだ。

「……ジャンヌ＝ダルクです」

言つしかなかつた。明らかに変だけど言わざるを得ない。神より賜りし神聖な名前なのだが、ここに言つと恥ずかしいのはなぜだろ？。

恥じる事はない。恥じる事は無いはずなのに。おお……申し訳ありません守護天使様。このような私を見ておいでなら随分とお嘆きの事でしょう。

「ああ、ラ・ピュセルを愛する会の方ですねー、どういたしましらへ。」

私は啞然とした。

この女将さんは、私の名前にもCOSPLAYで買つたアニメチックな衣装にも動じず、爽やかに私を部屋に案内するではないか。これには、まことに驚いた。少しばかり感心してしまつた。悠然と私の前を歩く様もまた、どこか優雅だ。

案内された部屋は「十五夜」という名前だった。

お座敷で、座布団と机がおおよそ30人分程の為に並べられていました。

た。そして、その机の一つに既に座つて何かメモの様なものを見ている男性がいる。

多分、彼だろう。彼に違いない。

私は、やや硬い動きでその男性に近づくと、彼はさっとその場で立ちあがつた。

ジル＝ド＝レイ（前書き）

オフ会会場に辿り着いたジャンヌ。
先に来ていた1人の男性に近づく……

ジル＝ド＝レイ

「「」んにちはー、あなたは、もしや……」

「えつと、ああ……私が、ジャンヌ＝ダルクだ」

即座に気付くとは、さすが私も美処女或いは美少女だ。まだ転生前の威儀も残っているのなら少なからず喜ばしい。しかし、そんな気持ちは表に出す事はしない。まずは、この男の素性を知らねばならない。

「君がジル＝ド＝レイか？」

「はい。お久しゅう、ジャンヌ様。昔と変わらずお美しいですね。」

変わらない事は無いと思う。いや、容姿は前世よりも上だと思う。それはさておき、この男の容姿だが……まあ、わかり易く言うと、相方が女子ボクシングを始めた、多人数アイドルグループ大好きの、ナレーションもよくやるメガネの太ましいお笑い芸人にそっくりである。この男が本当にあのジルであるのならば、正直なところ転生に失敗したと言つていいだろう。しかし、本人の前でそんな事を言うのは失礼だから言つまい。それに、私は、顔で人を差別したりするほど器量の小さい人間では無い。平等に向き合つのが主義だ。冷静に肝心なところを確かめよう。

「まだ、君の事を信じたわけでは無い。君があのジルであるのならば、この問い合わせよ。本当にそなへり、せつと答へられるはずだ」

「はい、仰せのままに」

彼は騎士の様なポーズをとつたが、まったく似合わない。そもそも、何故にこんなキノコみたいな髪型にしているのだろう？似合っていると思つているのか、それとも大きい顔を小さく見せるためか？オルレアンにも似たような髪型の男はいたがあれはある程度流行していたからだ……色々と頭の中で詮索してしまって勿論聞く事は無い。今はこの言葉を発して正否を確かめるのみだ。

「では、聞いつ。ラバテラの花の香りは……？」

「我らの神鳴を神明を呼びてまし、栄華の道を切り開く

男は、迷いなく答えた。
かつて、戦の時にほんの一部で使つていた呼応式暗号を彼は正確に答えたのだ。

「……なるほど。どうやら、嘘ではなさそうだな。ジル

「おわかりいただけたよう安心しました」

私達は手を取り合つ。

はためからみたら「コスプレ美少女と、お笑い芸人が語り合つてゐる妙な光景なのだろうが、幸いまだ誰も来ていない。

「よもや、あなたが転生されていふとは思ひませんでした。再び会つ事が出来て光榮にござります」

「お互ひ、変わつたな。ジル」

ジルは本当に大きく変わった。まさに丸とスッポン、ヴィーナスと紫式部だ。

昔は、なかなかヒゲの似合つ男だった。今はやけに肌がツルツルテカテカしている。「ヒルな雰囲気は変わらないが、見た目と完全にミスマッチであり、動きや言動が全てショートコントのネタのように見えてしまうのが複雑である。ただ、勿論、それを笑つたりはない。そもそも、私はお笑い番組等でウケることはほとんどない芸人泣かせな人間なのだ。ちゃんとジルと分かつた以上、昔の様に接する。

「君は、どうやって転生したのだ？ もしや、鍊金術か？」

「おお、お詳しいようですね。ジャンヌ様」

「まあな。伊達にひきこもつていたわけではない」

「おお、流石は。そうです、私は鍊金術によつてこの世に転生いたしました。方法を言いますと長くなるので今は伏せておきますが……危険な賭けではありましたが、何とか成功したのですよ。ジャンヌ様は、一体どのような方法で？」

「わからぬよ。気がつけばこの体だったのだ。おそらくは、大いなる神によるものだと思うのだが……何も聞こえないのだ。あの頃聞こえた天の声が聞こえない。だから、今となつてはただ、昔聞いた神の言葉を語ることしかできんよ。」

「むへ……なるほど。やはり、そうですか。」

「なんだ？ 君は、何か知つているのか？」

「ええ、あなたとコンタクトをとったのはそこもあるのですか
」

「話してくれ。一体君は、私に……」

「ああ、この話は会の後にしましょ。他の人が来ましたよ

」
そう言われて私は背を向ける。
いくつかの軋む足音が聞こえてきた。

そして、僕は始まる（前書き）

ジル＝ド＝レイが本物であると確認したジャンヌ。
ほかのメンバーも次々とやつてくる。

そして、会は始まる

会の始まる時間が近づくにつれ、少しずつこの部屋「十五夜」には人が増えて行った。

ひとまず、私はホッと胸を撫で下ろした。これだけ来てくれば十分だ。

それにしても、予想外だったのはその面子の見た目だ。

最初、私はほとんどが20～30代の若い男性ばかりかと思つていたのだが、以外にも年齢層は広く、女の子からおじいさんまでいる。私は、人を見抜く力には自信があったのだが、ネット上の発言から、その人間の素性を的確に推理することは残念ながら出来なかつたようだ。そもそも、ジルがキノコおじさんだった時点では全く見抜けていなかった。ちょっと悔しい。

みんな次々と、ジルの名簿にハンドルネーム（ネットの中での名前のこと）を言って、好きな席に座つていいく。私は、それを正座しながらろくに挨拶もせず無言で見ていた。バレているかもしれないとは思いながらも、今はまだ1人の参加者を装つていた。

そして、はじまりの午後6時になつた時には、席のほとんどは埋まっていた。

オフ会としても十分な集まりと言えそうだ。

時間が来たと分かるや否や、ジルは部屋の隅に立つ。
いよいよ開会なのだから、皆の席には料理が置かれ、ノックには
飲み物が注がれた。

「えー、皆さま改めましてこんばんは！ 本田は「ラ・ピュセル
を愛する奴」にお集まりくださいまして誠にありがとうございました。
私が、今回のオフ会を企画させていただきましたジル＝ド＝レイで
ごす！ ジャンヌさんのブログにはいつもお世話になつております
！ 本田は司会進行を務めさせていただきますので、皆さま応援ヨ
ロシクお願いいたします！ 盛り上げて行きましょう！」

会場から、大きな拍手が起こる。歓声も少し起つた。
はじまりの言葉としてはまあまあといったところだね。

「では、まず最初にブログの管理人であり今回の会の中心的存在
であるジャンヌさんにご挨拶を頂き乾杯の音頭を頂きたいと思
います。」

ええっ！？

私が最初なのか？ みんなが自己紹介した後では無くて私が最初
なのか？

「ああ、お願ひします。」

「……」

私は、しぶしぶ席を立つた。
視線はみんな私の方を向く。体が震える、心臓が高鳴る、妙に緊張する。

ひきこもりが長かつたせいか、こういう状況に体も心もついて行かない感じだ。

いや、何を言っているのだ私は？

私はかつて大軍を率いたあのジャンヌダルクだぞ？

数千数万の兵の前で快活に言葉を発したのを忘れたのか？

おおよそ30人。たかが30人だぞ。何を恐れる事があるか。

大丈夫だ。大丈夫。この程度どうということはない！

私は、きっと目に入れた。

そして、ゆっくりと川の流れの如く神に頂いた麗しき口を開く。

「みなさん、お集まりいただき、ありがとうございます。私が、
＜ラ・ピュセル＞の管理者、ジャンヌダルクです。沢山の方が、当
ブログに来ていただいている事、まことにうれしく思っています。
おかげで最近は、人間というものに再び期待感を持つようになつて
きました。コメントも、いつも有難く拝見させていただいておりま
す。返事に拙い部分があるかもしませんが、大変感謝していると
言う事がわかつていただけると幸いです。オフ会と言うものは初め
てですが、今日はお互い、良い会にしましょう。では、大いなる神
に対して、この会を開く事が出来た事に対して……ええと、乾杯！」

「かんぱーい！」

皆、コップを天高く掲げ、次にそれを他の人のコップに当てる鳴らす。

チリンと良い音が室内にこだました。

私はそれを聞いて、かつて戦いに勝った時の祝杯を思い出し、懐かしく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281z/>

オフ会のジャンヌダルク

2011年12月20日21時54分発行